

2022年1月2日 新年礼拝

説教題「主が喜ばれること」詩編 34 編 1～15 節

主任牧師 加藤 誠

「どのようなときも、わたしは主をたたえ／わたしの口は絶えることなく賛美を歌う。わたしの魂は主を賛美する。貧しい人よ、それを聞いて喜び祝え。わたしと共に主をたたえよ。ひとつになって御名をあげよう。」(詩編 34 編 2～4 節)

新しい年、最初の主の日に共に礼拝に集い合える幸いを大切に受け取りたいと思います。世界では新型コロナウイルスが猛威を振るい続けるこの時、命の危機の中にある方たち、また懸命に治療にあっている医療従事者の方たち、また長引く経済不況のために日々の暮らしの厳しさの中にある方たちが多くおられることを覚えながら、今朝ここに招かれた礼拝が、神さまの前に静まり、神さまの愛につながられ、隣り人の命につながられる礼拝となることを祈りたいのです。

今朝の詩編 34 編は、サウル王から命を狙われたダビデが狂気の人を装い何とか生き延びるといふ、ギリギリのところまで神さまに守られた喜びが歌われています。「どのような時もわたしは主をたたえ、賛美する。わたしと共に主をたたえ、一つになって神さまの御名をあげよう！」というダビデの力強い呼びかけを聴いていると、わたしの心にも賛美が注がれて心が高められていくのを感じます。

日本では年末になると必ず歌われるベートーベンの第九交響曲「歓びの歌」。日本では約百年前の 1918 年、第一次世界大戦中に徳島の俘虜収容所に捕えられていたドイツ兵捕虜たちがオーケストラをつくって演奏し、80 人の男声合唱を響かせたのが最初と言われています。この「歓びの歌」で歌われている「歓び」とはどういうものなのだろうと歌詞の意味を調べてみました。原作はシラーという詩人が書いたものですが、そこで歌われているのは「聖書の創造主なる神さまへの歓喜、湧き上がる歓び」です。例えば、松本憲治さんの翻訳をもとに少し言葉を補って紹介すると、「歓び、それは美しい神の火花。わたしたちは神の火花に魅惑され、天の高み、あなたの聖なる神殿に入って行く。あなたの不思議な力が、わたしたちを再び結びつける。生き方が違ってしまい、分裂してしまった私たちを。すべての人々は兄弟姉妹となる。あなたの優しく大きな羽根の下で。この世界で一人の友とのつながりを得る、大いなる幸せに恵まれた人びとよ。ともに歓びの歌を歌おうではないか」。つまり、この曲で賛美されているのは、神さまの創造と和解の御業であり、そこで歌われている「歓び」は、分裂し、争いの中にある私たちが、神さまの優しく大きな羽根のもとに再び結び合わされた「歓び」なのです。そして後半、歌詞は次のように続きます。「歓びは口づけとぶどう酒を私たちに与え、死の試練を受けた友をも与えてくれた。神の、美しく偉大な意図に沿って、兄弟たちよ、喜び勇んで君たちの道を進め。抱き合おう、幾百万もの人びとよ。あの星空の上に、愛すべき父なる神が住んでおられるのだ。あなたがたは跪（ひざまず）いていますか？あなたがたは創造主なる神に気づいていますか？あの星空の上に神を求めよう。」

ここに出てくる「死の試練を受けた友」というのは、クリスチャンでなければ、いったい何のことか分からないでしょうが、新約聖書を知っている者にはイエス・キリストが暗示されていることが分かります。とするなら、この「歓びの歌」の中心には、イエス・キリストを通して与えられた「歓び」が歌われているということです。そして最後は「あなたがたは跪いていますか？創造主なる神に気づいていますか？あの星空の上に、神を求めよう」と礼拝への招きが歌われていくのですから、なんと「歓喜」の賛美歌であり力強い礼拝への招きでしょうか。

わたしは一昨年ステイホームを求められたときから、朝のウォーキングをはじめました。朝6時すぎに家を出て大井第一小学校横の坂を下っていくのですが、そのときの東の空の色にいつも魅せられています。30秒単位で刻々と空の色が変わっていくのです。冬至の12月22日が一番暗くかったのですが、それ以降、たった一週間ほどで朝6時の空の色はぐんと明るくなりました。「ああ、まさにクリスマスの光に照らされた世界だ！」。イエス・キリストをいただいた世界が暗闇から希望に向けて変えられていくのを見せられているような思いになって、この一週間は特に心の中が明るく照らされるのを感じています。

主イエスは「神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」と宣べ伝え、人びとの病を癒されました。「神の国」とは「神の愛」のこと、「近づいた」とは「私たちのただ中に突入してきた」の意味、「悔い改めて」とは「心と体の向きをかえる」こと。つまり「神の愛があなたがたの暮らしのただ中に突入してきた。その愛に心と体をしっかり向けて、大切に受け取り、一緒に生きていこう」と呼びかけ、そして病を癒していかれたのです。

「福音／神の愛」を受け取り、そして「病の癒し」。この順番が大切です。なぜか。単に「病気の癒しを願う」だけでは、私たちは「自分中心、自分の願い中心」から変わらず、周りの誰かの命を傷つけ続けるからです。それに対して私たちが「神の愛を中心にし、神からいただく慈しみや勇気、希望を誰かと分かち合う」方向に変えられること。私たちの人生の目的が「わたし」から「神さまと隣り人」に向けて方向転換が起こることの大切さを主イエスは示されたのです。

ある人がこう書いていました。「生きること自体は空しい。みんな死に向かつて生きている。どんなに健康な人もやがて年老いて、病気を抱えるようになり、最後は一握りの灰になるほかない。だから何に向かつて生きるのか。その目的、方向を知らずに生きても空しさを重ねるだけだ」と。その私たちに主イエスは、神の愛に結びつけられて生きる幸いを教えてくださいました。私たちがたとえ病気で弱ることがあったり、年老いていろいろなことができなくなったとしても、それはむなしい死に向かうのではない。神の愛に結びつけられているなら私たちは復活の希望に向かう者とされることを教えてくださいましたのです。

「まず神の国と神の義を求めて」、私たちの心と体を神さまと隣り人にしっかりと向けて、神の愛を大切に受け取り、共に一つになって、主をほめたたえる歩みをしていきしょう。そこに主が喜ばれる道が刻まれていくことを信じて。